

大人の旅 黒部立山アルペンルート

7/17/2012

北村社会福祉士事務所

代表 北村弘之

梅雨の晴れ間の7月上旬に、長野県大町市から入り、富山県立山側に出る「黒部立山アルペンルート」の旅を楽しむことができました。大人の旅と称したのは、見るもの、接するものが全て自然であり、また、人の英知と思いが入った黒部ダムの開発様子、そして昔からの立山信仰の様子など私にとって大変興味深いものだったからです。

1日目は快晴の中、大糸線の大町駅からバスとトロリーバスで黒部ダムへ。そしてケーブルカーとロープウェイで立山室堂迄の行き日本最高所のホテル立山で宿泊。2日目の午前中は雨だったため、弥陀ヶ原までバスで降り、高原散策と布橋の歴史散策をしてから当日の宿宇奈月温泉まで地鉄の旅。そして最終日は、曇り空の中、トロッコ電車に揺られ黒部溪谷の樺橋までの往復。そして魚津、越後湯沢経由で帰路につきました。

1. 数多くの乗り物に乗った旅

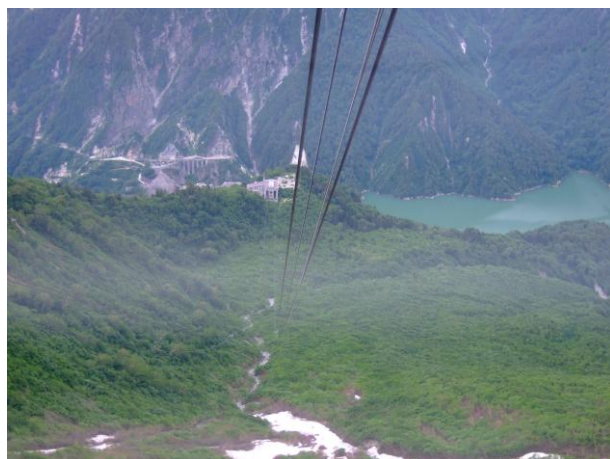
家を旅立ってから、帰ってくるまでに何と23の乗り物に乗りました。まずJRの特急電車で大町駅。そこから扇沢まではバス。扇沢から黒部ダムまで「トロリーバス」。このトロリーバスは日本では、扇沢と立山の2路線のみで運行と聞きました。このトロリーバスは、形状はまったくバスですが、車のようなナンバープレートがありません。それは電車扱いだからです。

また、立山ロープウェイは、全長1.7kmと距離はあるものの途中に支柱がないのが特徴です。

この春、新台に取り換えたということで眼下に黒部湖を見渡すことができました。(写真右)

その後、もう一つのトロリーバスに乗り、一気に立山室堂2,450m(最高所)までにたどり着きました。朝8時30分に自宅を出てから夕方17時には日本で最高所にあるホテル立山に到着です。

2日目は、高原バスとケーブルカーを利用して立山駅迄。その後富山地方鉄道のローカル線に乗り、宇奈月温泉。3日目は、有名なトロッコ電車で宇奈月から樺平までの往復160分の旅と、富山地方鉄道のローカル線(宇奈月-魚津)です。乗った回数もすごいですが、乗車時間だけでも3日間で15時間になりました。乗り物を利用することで黒部立山アルペンルートは高齢者も相当多く旅を楽しんでおられました。大自然の絶景を眺めながら、ゆっくりとした語らいができる旅でした。年間約100万人の旅人が訪れるのもわかります。



2. 絶景の自然

以前は秘境の土地であったが故に信仰の山として栄えたものが、今や戦後の電源開発の拠点の一つとして日本中に名の知れた黒部立山山岳地帯。立山室堂付近には、夏とは言え残雪が残っていま

した。室堂平にあるホテル立山は、約 100 室 350 名の宿泊者を泊めることができる設備で、自然の中に重厚な多々住まいでした。落ち着いたホテルの中で気に入ったのが、五階にある「ロビー」。旅人に雨などの日にゆっくり過ごしていただきたいという配慮から造られたというものです。その中から、「雪の大谷」が見えました。今年は雪の高さは 17m となり例年より少し多かったようです。このホテルは、冬の間は閉鎖なのですが、建物内の結露を防ぐため暖房運転をしているとのこと

です。また、標高約 2000m の弥陀ヶ原から 1000m の美女平までの溶岩台地の高原には大小で約 300 個の「ガキ田」が点在しており、水とともに高原植物の宝庫でした。そんな中、弥陀ヶ原高原では、雨の中 1 時間ほどの散策をしました。本当に大自然を満喫したひと時でした。この弥陀ヶ原高原は、この 7 月に「ラムサール条約」に登録されたことを現地で聞きました。今後とも残してもらいたい自然地です。また途中、落差 350m 日本一の滝「称名滝」をバスの中から観ることができました。この眺めから観ると、日本にもこのようなスケールの大きな自然があったかと思うほどでした。



弥陀ヶ原高原の高山植物



ホテル立山から雄山を観る

3. 信仰の山 「立山」

日本の三大霊峰山の一つである立山とは雄山とおおなんじやま、ふじのおりたてからなる 3 山を総称したものです。その雄山には信仰の中心となる雄山神社があります。全国の霊峰山として、富士山と白山(私の故郷)があり、私にとってともに登山経験があります。室堂付近の「地獄谷」という名称に表れているように、あの世に入ってから言い伝えが多く残っております。

その一つが平安時代から「禅定登山」です。三悪道(地獄道、飢餓道、畜生道)の穢れを取り払うものです。しかも女人禁制山でした。その後、女性も穢れを取り払う儀式として「布橋灌頂会」というものができ、現在でも秋の彼岸に執り行っているようです。

地元の芦峯寺にある立山博物館で映像を観てきました。

芦峯寺の閻魔堂、布橋、姥堂を巡ることで、男性の立山登山と同じように浄土往生を約束するものです。目隠した女性約 70 名が、この世とあの世の間にある布橋を渡る儀式には荘厳さがありました。



手前がこの世、布橋の向こう側があので、実際に墓場になっていました

詳細は富山県映像センターの HP を観ていただけたら

よくわかります。

http://www4.tkc.pref.toyama.jp/eizou/topics_detail.phtml?Record_ID=2013e7719b46677168020a887f41d16d

4. 人の英知と血と涙の土木作業

今回の旅では自然の素晴らしさを満喫しましたが、その自然を相手に「電源開発」した人間の英知とそれと戦った人たちに敬意を表さずにはいられませんでした。大正年間から宇奈月の近くで発電が行われて以来、昭和に入り黒部第二、第三発電所が運転開始、戦後の昭和24年には「黒四開発構想」が発表されました。その後は、小説「高熱隧道」や石原裕次郎主演の映画「黒部の太陽」、NHK「プロジェクトX」でも紹介されたような多難な工事が遂行されました。

道なき山の中を徒歩でルート開拓をおこなったり、高低差がある中での隧道掘り、凍てつく寒さの中での工事、そして事故との遭遇。ひとりの人間が開発の決断をして、その人間が人間を動かす力。一人の力が輪となって結集した賜物だと感じ取ることができました。

今回の旅のルートでは、そのほとんどが工事の遺産建造物を利用したもので、現在も補修工事等で利用されており、トロッコ電車に乗車時には工事関係者の姿を多く目にしました。

また関電トンネルでの破砕帯では、80mの削岩に7か月もかかったこと。ダム工事では、178名の犠牲者が出たことなど厳冬期の中、よくぞ仕上げたものだと感心しました。現在では、関電の発電量のわずか1%しか担っていませんが、原子力発電が盛んになる前の時代に、このような山奥で10年近く工事したものだと思います。すでに完成から50年が経過しており、当時の関係者は少なくなってきたと思われませんが日本の誇る土木事業だったと確信しました。

厳しい自然環境下にあることもあります。黒部第四発電所は山の下にあります。これは自然景観保護と、厳冬期でも仕事が用意できる場所作り等があるようです。ちなみに、冬期にはトロッコ電車は動かず、6時間をかけて宇奈月から樺平まで歩くそうです。そこからまた徒歩で発電所まで行くとのこと。

放水する黒部ダム。右側の写真

下の写真は、ダム堰堤近くにある「慰霊の像」

